

## もうひとつの

### 保育園

浜口 紀恵

息子の通っている保育園は私立の無認可保育園である。どこが公立と違うかという点、まず建物からして、ごく普通のしもたや造りである。第一、庭と云うものがあるではない。仕方がないから、アヒルのお散歩宜しく、ゾロゾロ列になって出向いて遊ぶのである。涙もろい曾祖母など、今だに公立保育園の広々とした敷地を目にするごとに、「哲ちゃんも、こういうりっぱな所で遊ばせ

てやりたいねえ」と涙ぐまんばかりである。ところが、本人はむしろ、あちらこちらの公園に行けることで、愉快を感じている様子であるから、母親としては、一向に、「りっぱな保育園」に申し込みをする必要も感じないまま、3年が過ぎてしまった。

子供たちの遊び場は、保育園わきの道端であったり、目と鼻の先の公園であることもあるし、わざわざ20分も歩いて、それも、途中四車線道路を横切って遠くの児童公園まで出向くこともある。春の桜の盛りには、総勢30人程の少人数なのを幸いに、園長先生が自家用車で何往復かして下さり、給食持参で、お花見に連れて行って下さったことすらある。臨機応変に、遊び場を変えられるのも、私立の小規模ならではないかと思ひ、私などは、子供たちもさぞおもしろい事であろうと呑気にありがたがっているが、父母の中には、事故を心配して苦情を云う者も、案外多く居るようである。

哲郎の現在の悩みは、ヒーローごっこで、とかく怪獣の役（つまり、やられ役）にまわされることである。4

才児のすみれ組5名と5才児のひまわり組2名が、ひとまとまりにみどり先生のクラスとなっている毎日の中で、年長組のおき君やりゅうじ君は、自然、親分となって遊びの差配をする。当然良い役まわりはとってしまふのである。おまけに、哲郎は泣きべソなので、日に一回はなおき君にこづき回されて大泣きをする。

「僕にはかないっこないよ。だって、なおき君はもう6才で、ボクはまだ5才なんだもの。アーア、早く僕だって6才になりたいよ。」と妙にあきらめきつたことを云う。

確かに幼児期の一才の年の差は大きい。クラス別保育の時間がもうけられているとはいえ、基本的に、2才から6才までの子供が、一つ部屋で過ごしている暮らしの中では、年功序列の秩序が生まれるのも当然かもしれない。さらに、一クラスの人数があまりに少ないので、大きい子、小さい子いりまじって遊ばないことには、遊びが発展していかないという事情がある。年令別のクラス分けを離れて、園の子供たち全体が遊び仲間であり、良

くも悪くも、親分子分の間柄にある。そういう訳で哲郎も年長組の横暴に憤慨することはあっても、一方で年長さんを尊敬し頼っているものである。特になおき君は哲郎にとっては、絶対的存在で、哲郎がくやしい思いを味わった時の決まり文句は「許さないぞ、なおき君に云いつけてやる。」という、少々ふがいないものである。なおき君のいうことならば、正しいと信じてしまう。時には、なおき君の号令で、散歩の道すがらに「男はつーよい、女ははよーわい」のシュプレヒコールを叫んで男どろしの連帯を確認しあったりもしているのである。

親分格の2人が春には卒園していく。また来年度からは園舎も鉄筋三階建てに新築され、階上を遊び場として使えるようになるという。哲郎自身年長組に進級し、保育園での暮らしの様子が大きく動いていきそうである。母親としては、一日の大半を過ごす場である保育園が、今まで通りに、泣いたり怒ったりといったことが自由な心から出来る、伸びやかな場であり続けてくれるようにとばかり、ねがっている。